

# 宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319  
📠 (0198) 31-2320

・・・僕は賢治の切実な求めをどこまでも美しい人間の心として記憶し続けている。



・・・この「求める心」が描く軌跡の美しさに触れるたび、僕は、賢治という人の人生に思いを巡らせる。・・・一方で、根源的な悲しみを抱え続けていた人でもあった。そして、その悲しみが流れ出す源に手のひらを浸し、求める心のままに言葉を紡いだのが賢治という人だったと感じている。

作品「光のゆくさき」  
2020より

文・写真 奥山 淳志

## 切実な求め

写真家 奥山 淳志



僕にとっての初めての読書体験は「どんぐりと山猫」ということになるだろう。年齢としては小学校に上がるか上がらないかといったあたり。母は読書が好きな人間なので、それ以前にもたくさんの絵本や童話を読んでもらっているのは間違いない。でも、本にまつ

わる記憶を延々と遡っていったとき、「どんぐりと山猫」にたどり着く。同時期に読んだ本と「どんぐりと山猫」がどのように異なり、なぜ、記憶に深く残るものになったのか、当時の印象を思い起こしてみようとしてもうまく言葉にすることができない。ただ、「とびどぐもたないでください」という奇妙な言葉遣いで手紙を書いた馬車別当や、黄色い陣羽織を着た緑色の目をした山猫、そして、わいわいがやがやと大騒ぎする黄金のどんぐりたちが、本を閉じてしまった後であっても、僕の胸のなかで踊り出すほどの瑞々しい生命を持ち始め

たのだった。でも、本当の意味で賢治童話に魅かれた理由は、『どんぐりと山猫』のような不思議にユーモアあふれる作品に魅力を覚えたからではないような気がする。

何か、違う。この賢治という人が描く世界はどこか違うと思ったのは『よだかの星』だろうか。あるいは『なめとこ山の熊』、それとも『グスコブドリの伝記』か『ひかりの素足』だっただろうか。ただただ幼稚だった僕に、これらの賢治童話を読み込むことができたとは言い難い（それは今だってそうだ）。しかし、これらの物語に描かれる悲しさと哀しさは、深い理解を伴わずしても、当時の僕の胸の深いところに沈んでいったのだった。以来、賢治作品は、気持ちの底から、ふわふわと浮かび上がるようにして僕の前に現れた。

『銀河鉄道の夜』を手にし、やはりわからないと眩しながらも、それでも胸のうちに震えるような感情の芽生を覚えたのは高校生のときだったと記憶している。賢治童話を1冊にまとめた電話帳のような本をバックパックに押し込んで、数ヶ月にも渡る長い海外での一人旅に出たのは大学生の頃だった。細部まで読むことができないでいた『春と修羅』を手に取ったのは、東京に出て、小さな出版社に就職した時だった。こうして振り返ると、賢治の言葉はいつも僕の人生を先回りして待っていてくれたのかもしれないと錯覚してしまう。ただ、上京後に僕と賢治との関係は少し変わりだす。関西に暮らしていた頃には外国ほどに遠いと思えた岩手が東京に出てくると意外なほど近いと感じた僕は、思いつきに近い感覚で賢治作品の舞台を旅してみようと岩手に向かったのだった。それはちょうど宮沢賢治生誕100年の年だった。

本当にわからないもので僕の人生はある意味、この旅によって大きく変わるようになった。賢治作品の舞台を訪ねる旅を通じ、岩手に完全に魅了された25歳の僕は、東京を引き払って岩手の雫石に移住したのだった。若いだけで何もできない僕がその後、写真家を名乗り、どうやって生きてきたかについては、またの別の機会に記すとして、岩手に暮らすということで賢治作品との距離感も変わっていったように思う。それはひとことで言ってしまうと、「賢治作品」に「書く人としての賢治、をより強く感じるようになったことだ。賢治がイーハトーブと呼んだこの地の光や風を感じ、歌うようにリズムカルで温かな岩手言葉の響

きに耳を傾ける雫石での暮らし。こうした日々は、岩手という風土の結晶をひとつひとつ拾い集め、言葉という名の美しいせせらぎの中に溶かし込んだ宮沢賢治という人をより身近に感じさせてくれた。

だからなのだろうか。賢治作品に対してもそれまでとは異なる感覚を持つようになった。今、僕が賢治作品を表現するとしたら「求める」という言葉が真っ先に思い当たる。賢治は「ほんたうのさいわい」を願い続けた人だった。でも、今の僕は「願う」という言葉だけでは賢治が胸に抱き続けた切実さを言い表せていないと感じる。よだかは生きるために他者の生命を奪うことを問い続けた結果、夜空で自らの身を燃やす。ジョバンニは母や友の幸いを願いながら、やがては本当の幸いの存在に気づき、それをどこまでも求める決心をする。熊撃ちでありながらも熊の生命を愛する小十郎は熊によって自らの生を閉じる運命を避けようとはしない。グスコブドリのイーハトーブを冷害から守るため、自らの生命と引き換えに火山を人工的に噴火させる。こうした登場人物たちの意思是「願い」という穏やかなものではない。火のように熱く、結晶のように一切の混じり気のない切実さを宿し、どこまでもまっすぐな軌跡を描いて進むものだ。作品を通じ、この「求める心」が描く軌跡の美しさに触れるたび、僕は、賢治という人の人生に思いを巡らせる。恵まれた家に生まれ、多すぎるほどの才能を持った人だったが、一方で、根源的な悲しみを抱え続けていた人でもあった。そして、その悲しみが流れ出す源に手のひらを浸し、求める心のままに言葉を紡いだのが賢治という人だったと感じている。

気がつけば、賢治作品がきっかけとなって、何のゆかりもない岩手で、僕は人生の半分近くも暮らしてきた。今となっては賢治が存在しない世界を想像することは難しい。僕は賢治の切実な求めをどこまでも美しい人間の心として記憶し続けている。



## 修羅の青いろ

詩人 暁方ミセイ



詩を書き、初めて賞をもらってから10年が経ちましたが、子どもの時抱いていた最初の夢は絵描きになることでした。その夢はある挫折で早々に断念したのですが、代わりに大学生になってから詩人になることに決

めました。

絵を自在に描く才能はなかったけれど、詩ならばきっと、もっとすごいことができるに違いない。その時進路を強烈に照らしてくれていたのが、宮沢賢治でした。

一番好きな画家はシャガールでしたが、賢治の色彩もまた人の心を染めあげ、一瞬にして別の場所へ運んでくれるように思います。詩が書けたら、絵を描くよりもっと多くを捉えることができるに違いないと思うことができたのは、宮沢賢治に出会っていたからだと思います。

\*

賢治の詩には本当に多くの、バリエーション豊かな色が出てきます。「日輪と太市」の白銀のなかに灯る真っ赤なズボンと日輪のまぼろし、「有明」の黄色と桃色と薄紫に染められる甘く澄んだ朝焼け。言葉の感触が、それらをそっと額の中に納めるようで、絵描きに挫折したわたしは大いに興奮しました。

色彩の中でも、青色は非常に多く賢治の作品に用いられ、特別な気がします。これについてはすでにたくさんの言及がありますし、その全てを読んだわけではないので、今でも自信満々に話すことはできないのですが、とにかく常々気になっていたことだったので、数年前に自分なりに『春と修羅』第一集をまずはよく読み、考えてみる機会を設けたことがありました。

畑山博さんの『教師宮沢賢治のしごと』には、賢治の教え子である瀬川哲男さんが、賢治が生徒の前で『春と修羅』の序詩を読み上げ、その意味を生徒たちの前で説明したと証言していることが載っています。瀬川さんは「青い照明だというのでしょう……賢治先生にとって「青い光」という意味は、餓鬼や修羅のことですからね」と語っていたそう。これを読んだ時、いきなり答えにいき

ついちゃった、と思いましたが、そうしてみると、詩「印象」に出てくる青がふと気になりました。

ラリックスの青いのは  
木の新鮮と神経の性質と両方からくる  
そのとき展望車の藍いろの紳士は  
X型のかけがねのついた帯革をしめ  
すきとほつてまつすぐにたち  
病気のやうな顔をして  
ひかりの山を見てゐたのだ

「ひかりの山」を藍いろ紳士は見てるので、ラリックスが青く見えたのでしょうか。ここに出てくる「神経の性質」というのは、わたしには網膜の色彩反転の性質のことに思えました。明るい外光を見ている間、目がその光の色を黄色と判断し、視線を移した瞬間に周囲の色を補色の青に染めて見せるあの、誰でもよく知っている現象です。

賢治はもしかしたら、人間の自分が人間のまま感じることができる世界の限界に、青という色を感じていたのではないかしらん。

誰かの内面感情が描かれるときにも、青という色が用いられています。「いかりののがさまた青さ」「かなしみは青々ふかく」（「春と修羅」）、「おおこののがさ青さつめたさ」（「春光呪詛」）など、青は怒りと悲しみが深くなり、苦ささえ感じるようになった時に現れるよう。そのことについて、賢治は1920年6～7月の、保阪嘉内宛の書簡でも語っています。

いかりは赤く見えます。あまり強いときはいかりの光が滋くなって却て水の様に感ぜられます。遂には真青に見えます。確かにいかりは気持が悪くありません。

また青は、「心象は／つかれのためにすつかり青ざめて／眩しい緑金にさへなつてゐるのだ」（「オホーツク挽歌」）、「第一の紺青の寂寥」（「第四梯形」）、「森はどれも群青に泣いてゐる」（「火薬と紙幣」）、「水いろの哀愁を焚き」（「小岩井農場」パート四）など、疲労やさみしさにより濃淡を変えますが、「チモシイの穂が青くたのしくゆれてゐる／それはたのしくゆれてゐるといったところで／莊嚴ミサや雲環<sup>うんくわん</sup>とおなじやうに／うれひや悲しみに対立するものではない」（「鈴谷平原」）



というように、通奏するテーマとしての意味合いもあるようです。

白い雲や薄ぐらい闇がほんのりと青く見えてしまふとき、人はふと、この世界の物質でできているにすぎない自分の目のことを思います。見ているものはすべて「見えている」ものにすぎない。肉体の中で、一時の感情や考えを持て余しながら、修羅を歩くしかありません。

そう考えたとき、賢治の青色は、見えないものを見ようとしているときに見る、生き物の限界の色なのでもあるんじゃないかと、思ったのでした。

地上全てに満ちる「光素」も、賢治の詩では可視化されたとき

この色を幻視させ、草木や影を染めます。人間の見る色は様々ですが、その人間でありながら同時に修羅とな



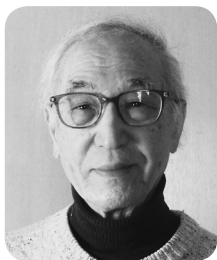
種山ヶ原の林(撮影：暁方)

り、自分自身と戦わねばならない時、青は久遠を透かしてみる、遮断の色、肉体の檻の色となるのかもしれない。それゆえに、青は修羅の色なのでしょうか。

詩を選んで10年ちょっと。賢治についても、もっと知りたいことが増えるばかりです。

## 宮沢賢治 — 元素で心と自然を表した発明者 —

京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘



「石っこ賢さん」と「短歌」から  
科学と文学の融合へ

宮沢賢治さん（以後、賢治）は小学生のころから石集めが好きで「石っこ賢さん」とよばれ、盛岡中学校に入学後はますます鉱物・植物採集に熱中し、盛岡

高等農林学校では本格的に鉱物学を学んだ。元素と周期表をも学び、鉱物の本質を理解するようになった。一方、中学生のころ、石川啄木の『一握の砂』に感動して短歌制作をはじめ、短歌の中に金、銀、水銀、コバルト、鉄、鉛、錫や酸素などの元素を使った。

検温器の／青びかりの水銀／はてもなくのぼ

り行くとき／目をつむれり われ

あをあをと／なやめる室にたゞひとり／加里  
のほのほの白み燃えたる。

コバルトのなやみよどめる／その底に／加里  
の火／ひとつ／白み燃えたる

（「歌稿B」）

蒼ざめた心、燃えたぎる青春のエネルギー、将来への悩みを元素で表す方法の芽生えを感じさせている。

盛岡中学校で化学を習っていたころに出版された『中等化学本論講義』（近藤清治郎著、1909）には80種の元素が紹介され、盛岡高等農林学校時代に用いていた愛読書『化学本論』（片山正夫著、1915）には72種の元素が書かれ、賢治は多数の元素を学んでいた。しかし、1926年に「羅須地人協会」を設立し、農村の人々への講義に使った資料『化学ノ骨組ミ』には、「原子ノ種類ハ90近クモアルケレドモワレワレハ左ノ14ヲオボエヤウ」とある。14の元素とは、酸素、水素、炭素、窒素、硫黄、磷、塩素、珪素、カルシウム、マグネシウム、鉄、カリウム、ナトリウムとアルミニウムである。わが国ではじめて出版された『理科年表』（1925）には87種の元素が掲載されている。賢治は最新の周期表で元素を勉強していたことがうかがえる。

賢治は、こうして元素と文学を結びつける表現法を追求していった。

### 作品の中で輝く元素たち

賢治の作品を読むとき、読者は賢治の日常体験にもとづく想像力の高さに驚く。そこには様々な元素が用いられ、言葉を越えた映像美が作り出され、作品をいっそう輝かせた。いくつかの例を紹介しよう。

「春の二つのうずのしゅげの花はすっかりふさふさした銀毛の房にかはってゐました。野原のポプラの錫いろの葉をちらちらひるがへしふもとの草が青い黄金のかゞやきをあげますとその二つのうずのしゅげの銀毛の房はぶるぶるぶるえて今にも飛び立ちさうでした。そしてひばりがひくく丘の上を飛んでやって来たのでした。」

（「おきなぐさ」）

賢治はこの話のはじめで「うずのしゅげを知っていますか。」と問い、「植物学ではおきなぐさと呼ばれます。」と説明している。植物の部位を銀、錫、金などに置き換え、輝く情景を描いた。

学者アラムハラドは街はずれの楊の林の中の塾で子どもたちに教えていた。「火が燃えるときは焰をつくる。(中略)硫黄を燃せばちょっと眼のくるとするやうな紫いろの焰をあげる。それから銅を灼くときは孔雀石のやうな明るい青い火をつくる。」「人が何としてもさうしないであられないことは一体どういふ事だらう。考へてごらん。」と子どもたちに問い、最後にセララバアドに聞くと「人はほんたうのいゝことが何だかを考へないであられないと思ひます。」と答える。「アラムハラドはちょっと眼をつぶりました。眼をつぶったくらやみの中ではそこら中ぼおっと燐の火のやうに青く見え、ずうっと遠くが大へん青くて明るくてそこに黄金の葉をもった立派な樹がぞろっとならんでさんさんさんと梢を鳴らしてゐるやうに思ったのです。」

(「学者アラムハラドの見た着物」)

賢治は人のあり方・モラルを明るい童話で語りながら、ここでは4種類の元素 硫黄、銅、リン、金を散りばめている。元素の炎色反応を想起させながら、瞳の奥にリンと金が映っている。

いやあの古い西岩手火山の  
いちばん小さな弟にあたるやつが  
次の噴火を弗素でやろうと  
いろいろ仕度をしてゐるさうだ

(詩ノート 「1070 科学に関する流言」)

フッ素を含む蛍石は、加熱すると蛍光を発し、さらに加熱すると割れてはじける場合がある。この蛍石を熟知していた賢治は、火山の噴火をフッ素で比喻し、独創的な表現を発明した。

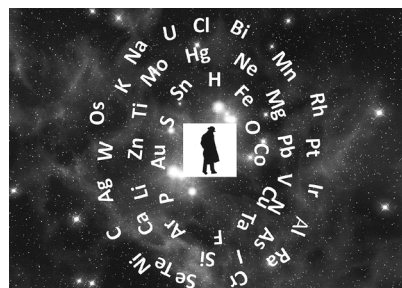
蒼鉛さうえんいろの暗い雲から  
みぞれはびちよびちよ沈んでくる  
ああとし子  
死ぬといふいまごろになつて  
わたくしをいつしやうあかるくするために  
こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたしにたのんだのだ

(『春と修羅』“無声慟哭”「永訣の朝」)

蒼鉛はビスマスのことである。『春と修羅』のはじめで賢治は自らを“おれは一人の修羅なのだ”と言い、妹トシが亡くなった無念の悲しみと怒りを、蒼鉛いろでたとえた。自然蒼鉛には黒っぽい鉱物のなかに白、黄や赤色の鉱物がまじり、修羅となった賢治の心を表すにふさわしい鉱物である。じつとこの鉱物を見ていると、賢治の悲しみや怒りが伝わってくる。

1937年に発表された吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』が最近話題となった。中学生のコペル君とおじさんとの対話の中で、おじさんが語る言葉「君は、水が酸素と水素から出来ていることは知ってるね。」は、1926年ころに書かれた「銀河鉄道の夜」第3稿で「セロの声をした大人」が語る「水は酸素と水素からできてゐるといふことを知つてゐる。」を彷彿とさせる。賢治と源三郎の考え方は、時代や環境を超えて一致しているのは素晴らしい。



賢治は作品、手紙や手帳に45種の元素を使い、自らの心象や自然を伝える表現法の一つとして

賢治が使った45元素(作成：桜井)元素を用いる方法を発明した。新鮮な感動を言葉の代わりに“元素”で表現することのすばらしさを実現したのである。



# 結い — 賢治が繋ぐ心と心 —

## 賢治さんの贈り物

劇団わらび座 脚本・演出家 栗城 宏



わらび座はこれまで「銀河鉄道の夜」「セロ弾きのゴーシュ」「どんぐりと山猫」「風の又三郎」と4つの賢治童話を舞台化してきました。それぞれに思い入れの深い作品ですが、特に「セロ弾きのゴーシュ」の上演が始まったのが2011年5月。東日本大震災の2か月後でした。

私はその時、舞台上で描くべき内容は「希望」だと思いました。楽長に厳しく怒られてもゴーシュは毎晩動物たちと練習を続け、ベートーベンの交響曲「田園」に挑みます。「襲い掛かる運命に立ち向かえと音符が叫ぶ」という歌詞を書きました。震災を乗り越えて行こうというメッセージです。勇気を振り絞って演奏するゴーシュの姿を、たくさんの子供たちが目を輝かせて観てくれました。

ところが、今回のコロナ禍でわらび座は大きな打撃を受けました。次々に公演がキャンセルになり、心がウイルスに感染してしまいました。襲い掛かる運命に立ち向かう事ができず、希望を持ってなくなっていったのです。人と人が出会う事ができない状況で舞台から何を発信し、何をお客様と共感したらいいのだろう。その答えが見つけれずに、私は新作の台本を一行も書けないでいました。

まさにそんな時に「イーハトーブ賞」受賞の知らせが来ました。賢治童話の舞台上演だけではなく、「東北の歴史・文化を題材とした演劇活動を長年継続し、地域の文化振興に貢献してきた功績」を評価してくださったのです。

本当に嬉しく、涙が出ました。涙のおかげで「心のウイルス」が消えました。「これからもちちゃんと仕事なさい」という賢治さんからのメッセージだと受け取りました。賢治さんは「心のワクチン」という最高の贈り物をくれたのです。

人とふれあい語り合う事、溢れる情熱のままに叫ぶ事、力を合わせて何かを創り上げる事、すべ

てが制限されています。遠くに離れた人とリモートで話をしても体温までは伝わりません。そしてこの世界は完全には元に戻らないと言われていきます。文化や芸術は不要不急の物とされてしまいがちですが、賢治さんの農民芸術概論の「いまやわれらは新たに正しき道を行き、われらの美をば創らね



舞台「セロ弾きのゴーシュ」

ばならぬ」という言葉に気づかされました。「新しい状況に必要な仕事があるはずだ。今こそ人間らしさを守るために、私たちの仕事も変わらなくては行けない」と。

今年わらび座は創立70周年になりますが、賢治さんが羅須地人協会で、農業をしながら音楽や演劇を楽しみ、人と語り合ったように、人が生きるために不可欠な「すきとおったほんとうのたべもの」になる仕事を進めたいと思います。

## 「雨ニモマケズ」に負けながら

田野畑村 島越自治親交会 鈴木 隆 昭



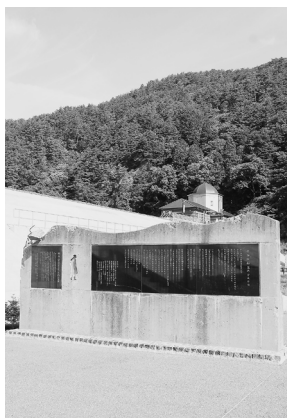
宮沢賢治という名前を知ったのは、小学校の学芸会で「風の又三郎」の劇をやった時でした。当時は、有名な人であることも花巻市出身であることも、ましてや田野畑村を訪ねて「羅賀丸」という通い船に乗り、「発動機船」という3編の詩を残していることなど知る由もなく、劇を間違わずに演じ切ることを考えていたと記憶しています。その後「雨ニモマケズ」の詩を知ったのが、確か中学生の頃で「そんな神様・仏様のようなことができるか」というのが当時の印象でした。

時は進み、昭和59年に三陸鉄道が開業する運び



となり、田野畑村の2駅の名称が「カンパネルラ 田野畑」と「カルボナード島越」に決まりました。他市町村は地域の特色をアピールする駅名なのに、なんで田野畑村は宮沢賢治なのか疑問を感じたことを思い出します。由来を聞き命名した思いにふれ納得はしましたが、ただ未だに「カンパネルラ」が発音しにくくて困っています。

さて、私にとっての宮沢賢治といえば、なんといっても「雨ニモマケズ」の詩です。現在自治会の会長を仰せつかっており、会長とはどうあるべきかを悩む毎日です。特に震災に遭遇し集団移転等で地域が分断されたような状況にあり、昔のような絆を築くべく努力をしているつもりですが、難しさを痛感しています。



詩碑「発動機船 第二」

そこで、心の拠り所としているのが「雨ニモマケズ」の詩です。特に「慾ハナク」「アラユルコトヲジブンヲカンジョウニ入レズニ」さらに「東ニ・西ニ・南ニ・北ニ」ある困りごとを解決努力する姿勢に、正に集落をまとめる原点があるのではと思っています。勿論その通り実行できないことは百も二百も承知ですが、見習う努力は決して無意味ではないと思います。

いずれは滅する命。往生する時に人生を振り返り、少しは世の中の役に立てたかな、と思えば本望かなと考えます。その時点で「雨ニモマケズ」の精神に反することになりますが…。もう一点、「デクノボー」とは呼ばれたくない心の狭さが頭をもたげます。やはり凡人の域を脱せない人生になりそうです。

でも、身近に「雨ニモマケズ」の心を糧にして生きていけたら豊かな人生になるのかな、と言い聞かせながら暮らしていくつもりです。決して負け惜しみではなく？

## ■「賢治の世界」セミナー 2020

世界中が突然のコロナ禍に覆われた2020年、「賢治の世界」セミナー（2011年開始）は、10年の節目を迎えました。

コロナの猛威が衰えず、「当たり前の日常」を奪われた学校、そして子どもたち。そんな子どもたちの不安や悲しみと「賢治さんとの出会い創出」という本セミナーの開催意義をどのように折り合いをつけ、「役割」を果たしていくか、戸惑いと葛藤の1年でもありました。

そのような中、市内13校15会場1,585名（昨年度実績：19校20会場2,623名）もの子どもたちが、



換気、マスク、ソーシャル… うとする姿がたくさん見ることができました。これも、感染防止対策にご尽力くださった教職員の皆様、時にマスク着用、換気協力等のご不便をものともせず熱弁熱演下さった12名の県内講師の皆様の支えによるものと、心より感謝申し上げたいと思います。

耳をそばだて、マスク越しの瞳を輝かせ、ソーシャルディスタンスいっぱいに身を乗り出し、「賢治の世界」に浸りこも

次年度こそコロナを吹き飛ばし、ゆったりじっくり、そして思いっきり「賢治の世界」に浸れる時間が戻ってくることを願っています。

## 《特別展》のお知らせ

### ◆童話「なめとこ山の熊」…絶賛、開催中!!

「なめとこ山の熊」は、猟師の淵沢小十郎が主人公のお話。小十郎は熊捕の名人ですが、本当は熊を捕りたくありません。熊の言葉もわかり、熊たちも小十郎のことが大好きなのです。でも、生活のために毛皮をとるしかないのです……

昔、花巻の西側の山（鉛方面）にも熊を捕る猟師がいたとされ、「ナメトコ」という山も実在することから、賢治は様々な事実情報をもとに、人間社会と自然界に生きる小十郎の物語を作り上げたと考えられます。作品の内容から当時の生活の一端が垣間見られる展示となっています。 わらぐつ、けら、はばき、火縄銃



**期間** 令和3年2月6日(土)～5月9日(日)

<自筆草稿の公開>

● 5月1日(土)～5月9日(日) 13枚

## ◆「賢治の祈り」

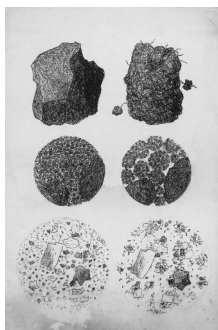
羅須地人協会の講義用に作図した「教材絵図」全49枚を、1年間・3期に分けて公開しながら、賢治が描いた理想や思い、願いを掘り下げていく展示となります。

絵図は、鉛筆の下書きの上に墨や水彩絵の具、クレパスなどを使用し、いずれもきわめて丹念に、そして分かりやすさが重視され描かれています。

大正15年、賢治は花巻農学校を退職し、桜町にある宮沢家の別宅に移り住みました。ここで始まったのが、いわゆる「羅須地人協会」の活動で、近隣や近村の青年たちに農業に必要な科学の基礎や土壌学を講じました。その時に作図、利用したといわれているものです。

49枚の教材絵図は、複数の領域にまたがるものもあって厳密な区分は難しいのですが、物理学、天文学、地質学、土壌学、植物学、作物学、肥料学等に分類されます。

稲作を中心とした農業の安定のための知識と技術を伝えるべく、協会にかけた賢治の情熱が感じられる資料です。



岩石の風化

左列は新鮮な安山岩。右列は風化した安山岩。上段が肉眼、中段がルーペ、下段が偏光顕微鏡で見た図。



降水蒸散

「植物」を中心に据え、それを取り巻く「水」の挙動と循環を描いた図。

## — I 羅須地人協会

1期目は、1枚目から16枚目までの絵図を展示するとともに、賢治が花巻農学校の教師を辞めて羅須地人協会を設立するまでを取り上げます。賢治が理想とする農村とはどういうものだったのか、活動の内容等を紹介します。

**期間** 令和3年5月15日(土)～9月5日(日)

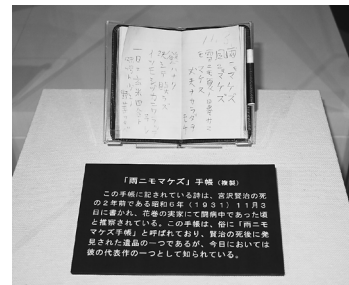
＜自筆教材絵図の実物公開＞

① 5月15日(土)～5月23日(日) 1～8枚目

② 8月7日(土)～8月15日(日) 9～16枚目

## — II 雨ニモマケズ

2期目は、17枚目から32枚目までの絵図を展示するとともに、東北DC(デスティネーションキャンペーン)関連企画として「雨ニモマケズ」手帳を公開します。賢治が農民としての実践を試み、羅須地人協会の活動を通して思い描いた理想と、死の2年前に書かれた願いや希望としての「雨ニモマケズ」。2 「雨ニモマケズ」手帳(複製)つの「賢治の祈り」を紹介します。



**期間** 9月8日(水)～令和4年1月30日(日)

＜記念講演会＞ 9月20日(月・祝)

林風舎 宮澤和樹氏

＜「雨ニモマケズ」手帳の公開＞

9月8日(水)～9月21日(火)

＜自筆教材絵図の実物公開＞

③ 9月8日(水)～9月21日(火) 17～24枚目

④ 1月22日(土)～1月30日(日) 25～32枚目

## — III 農民芸術

最後となる3期目は、33枚目から49枚目までの絵図の紹介と、賢治が思い描いた農村への祈りや願いとはどういうものだったのかを「農民芸術概論」を通じて言及していきます。

**期間** 令和4年2月5日(土)～5月8日(日)

＜自筆教材絵図の実物公開＞

⑤ 2月5日(土)～2月13日(日) 33～40枚目

⑥ 4月29日(金)～5月8日(日) 41～49枚目

## \* 編集後記 \*

当時田野畑村に赴任していた青年教師は、三陸鉄道開通に歓喜する人々の輪の中にいました。長く“陸の孤島”とまで呼ばれた交通の難所に生きる人々にとってまさに宿願でした。そして「カンパネラ田野畑駅」「カルボナード島越駅」。童話の世界に迷い込んだような駅舎の誕生に子ども達は、写生だ遠足だと大はしゃぎ。特に、お洒落なカルボナードとその前に広がるかわいい砂浜は大人気でした。一方、「なんでここで宮沢賢治?」の思いを持ちながらも鼻高々で子ども達に賢治を語る自分もいました。

そして、東日本大震災。変わり果てた姿に涙が止まりませんでした。その田野畑村で復興の先頭に立つ鈴木さん(村議会議長でもある)にご寄稿いただきました。これも賢治が繋ぐ縁でしょうか。個人的な後記をお詫びしながらも、田野畑村、そして(賢治にとっては究極的に理想の人間像とされる)“デクノボー”鈴木さんに感謝とエールを送らせていただきます。